

気品

中山義秀氏が、ある文学全集に収めた自作集の扉に、つぎの詞句を書きつけている。

芸術は気品なり

人生も亦然り

いかにも中山氏らしい、凜とした響きをもった言葉である。

芸術は気品なり——というやや強引な断定が、私は好きである。草萌ゆる小川の向岸へ、びよんと飛び越えるときのような爽快さを、この語からおぼえる。

「人生も亦然り」といって、「人間も」といっていいないとところに妙味がある。人間は生まれながらにして気品を身にそなえている場合がある。やはり血は争えぬ、というような注釈をつけて感歎するのは、そういう人に出逢ったあとである。しかし中山氏は、このような種類の気品をい

っているのではない。

人生は、人間が両親から享けた可能性を、みずからの努力によって開發するところに創造されてゆくのであって、そこには、人により程度の差はあるとしても、血のにじむような経験がともなうのが普通である。そういう人生そのものから、氣品はおのずからに匂い出るものなのである。

「体験」と「経験」とを明確に區別して物を書いている人に、森有正氏がある。森氏の思索は、ここ数年來、「経験」ということを中心に進められているように思う。『展望』の本年一月号に、「雑木林の中の反省」というエッセイを載せているが、その中に右の二つの語の概念の相違を明快に規定した一節があるので、引用する。

品

……欲求不満から欲求充足へ、それを民主主義、自由、平和と名づけてみても、それは洵まことにつまらないものである。こういうものが根底にある生活を私は体験と呼ぶのである。それは広い意味で経験の一部であるが、ある本質的なものが欠けている経験である。換言すれば、自己の中に批判の原理を包含していない経験であって、私はそれを体験と呼んで本当の人間経験から區別するのである。

氣

森氏の言いたいところを私見によって整理してみると、こういうことにならうか。体験とは、

その人が単に欲望の満足のみに関心をもつて生きている場合に言い、経験とは、その内部に入判の原理Vをもっている場合に言う。欲望の満足のみに心をかけている人は、欲望の本質から、たえず欲求不満におそわれなければならない。しかしそこからは、何物も生まれて来ないばかりでなく、はては身心の破滅を招くのがおちである。それに反して、経験の方は、理性によって欲望に適度の規制を加え、欲望を逆に創造のエネルギーと化す知恵の発動する契機を内包する。

このような経験を内容とする人生は、たくましくしておのずから気品をそなえてくるものである。その気品は、すでに身分・階級・財産などとは無関係に創造された、人生の価値そのものであるといつてよい。